感応

岩村透

青空文庫

私がまだ巴里で画生をしていた時分は、一緒に部屋借りをしていたのは、布哇生れの米国人であった。この人の描いた画は、日本でも誰か持っている人があるだろうが、中々巧いもので、殊に故郷の布哇で有名な、かの噴火口の夜景が得意のものであった。この人は彼地有名の銀行家ビショップ氏の推薦により、特に布哇出身の美術家を養成する目的で、この巴里の美術学校へ送られたのである。私はこの男と共に、巴里の一寓に住まって、朝夕皿を洗ったり、煮物をしたりして、つまり二人で自炊生活を営んでいたのであった。食後の休みなどには、種々の世間談も初まったが、この怪談というものは、何れの人々も、興味を持つものとみえて、私等は或晩のこと、偶々それを初めたのであった。

この男が、まだ布哇の伯母の家に、寄寓していた頃、それは恰も南北戦争の当時なので、伯母の息子即ちその男には従兄に当たる青年も、その時自ら軍隊に加って、義勇兵として戦場に臨んだのであった。その留守中のこと、或晩最早家の人も寝鎮って、夜も大分更けた頃に、不図戸外で「お母さん、お母さん、」と呼ぶ従兄の声がするので、伯母もその男も、共に眼を覚して、一緒に玄関まで出て、そこの扉を開けて、外を見ると、従兄は勿論、誰の姿も其処に見えない、不思議とは思ったが、その夜はそれなりに、寝てしまったのである。翌朝になって、家人一同が、昨夜の出来事を談して如何にも奇妙だといっていたが、多分門違でもあったろうくらいにしてその儘に過ぎてしまった。やがてそれから月日も経って、従兄も無事に戦争から、芽出度凱旋をしたのであった。勇ましい戦争談の末に、伯母が先夜の事を語ると、従兄は暫時、黙って指を繰ってなどしていたが、やがてポンと膝を叩いていうには、「それじゃ、全く私の声だったかもしれない、というのは、その日は恰度、〇〇の大戦争があった日なので、私もその時に、この足をやられて遂に仆れたのだが、何しろ戦争が激しいので、負傷者などを、構ったりなどしていられないから、仆れた者は、それなりにして、全軍は前方へ進んで行った、私はその晩一夜、寒い霜の夜に曝されたなり、病院にも入れられず、足の疵の痛いので苦悶をしていると、この時まざまざと故郷の事などが、眼の前に浮んで来るので、私は思わず「お母さん、お母さん」と一口二口叫んだが、それが丁度その時刻頃であったろう」と、従兄自身も不思議な顔をして語ったので、傍に居たその男も、頗る妙に感じたと、その夜その男が談したが、これ等も矢張、テレパシーとでもいうのであろう。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　百物語怪談会」ちくま文庫、筑摩書房
　2007（平成19）年7月10日第1刷発行
底本の親本：「怪談会」柏舎書楼
　1909（明治42）年発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2008年9月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

感応

岩村透

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/